

「男のなかま」でありがとう

三浦 旺典

ぼくのおじいちゃんは、ぼくのことが大スキです。おじいちゃんは、ぼくのおかあさんのおとうさんと、おじいちゃんの子どもは女ばかりだったから、「男のなかま」ができて、とってもうれしかったんだって。ぼくが赤ちゃんのときは、いつもおじいちゃんがぼくをだっこしてくれただんだって。

ぼくがぼい園に行くときも、ぼくが大きなこえで「いつてきまーす！」と言うと、おじいちゃんも大きなこえで「いつてらっしやーい！」と言って、車が出るまでまどから手をふつてくれた。おかあさんがかえってくるまで、ぼくは、いつもおじいちゃんといっしょにあそんだり、テレビを見たりしてすごした。買ったくれた本のふろくを、いつも一生けんめいくみ立ててくれたものおじいちゃんだ。

ぼくがもつと小さかったころ、へやでころんだとき、おかあさんも近くにいたのに、「おじいちゃん！」って、大きなこえでないたんだって。こんなとき、おじいちゃんはずっともやさしくて、おかあさんより、いいばんそうこうをはってくれる。ぼくのみかただ。

おじいちゃんは、いつもおもしろいことを言う。おばあちゃんはおこるけど、ぼくはとっても楽しいよ。おじいちゃんが見ていたテレビも、ぼくのすきなチャンネルにかえてくれて、ぼくのすきなテレビもいっしょにすきになつてくれる。ぼくの

お気に入りのおかしがわかると、「大人買い」してたくさんよいしいてくれる。おじいちゃんは、いつもぼくが夕がたかえってくるのを、楽しみにまっていられる。

ぼくがオセロがつよくなったのも、おじいちゃんのおかげだ。おねえちゃんもおかあさんも、なかなかいっしょにやってくれないのに、おじいちゃんはいつも、ぼくのあいてをしてくれて、ぼくがまけるとかわいそうだからって、かつほうを教えてくれて、わざとまけてくれた。おじいちゃんとなんどもやっているうちに、自分より大きい子や、おともだちのおとうさんにもかてるくらい、ぼくはオセロがつよくなった。

ぼくが小学生になると、あまりいっしょにあそべなくなつた。でも、やっぱりいつもおやつをよういしてまっていられる。おしゅう字のおむかえにもきてくれる。テレビを見るときは、一ばんテレビを見やすい、おじいちゃんのいすをぼくにゆずつてくれる。

おじいちゃん、ぼくもおじいちゃんが大スキです。これから、はじめて聞くことばのいみを教えてくれたり、楽しい話をしてね。ぼくの話もたくさん聞いてね。ぼくたちは、「男のなかま」だから、これからもいっしょにいようね。おじいちゃんいつもありがとう。これからは、ぼくがおじいちゃんのお手つだいをするからね。